

薩摩硫黄島の火山活動解説資料

福岡管区気象台
火山監視・情報センター
鹿児島地方気象台

＜噴火警戒レベルを 2（火口周辺規制）から 1（平常）に引き下げ、火口周辺警報を解除＞

薩摩硫黄島の硫黄岳では、6 月 3 日から 5 日にかけて、ごく小規模な噴火が時々発生しましたが、6 日以降噴火は確認されていません。

7 月 9 日に実施した現地調査では、噴気地帯等の一部に高温域が認められる程度で、噴火の兆候は認められなくなったと判断し、本日（10 日）11 時 00 分に噴火予報（噴火警戒レベル 1（平常））を発表し、噴火警戒レベルを 2（火口周辺規制）から 1（平常）に引き下げました。

【防災上の警戒事項等】

硫黄岳火口では噴煙活動が続いており、火口内では火山灰等の噴出する可能性があります。また、火山周辺では、火山ガスに注意してください。

○ 活動概況

薩摩硫黄島の硫黄岳では、6 月 3 日から 5 日にかけて、ごく小規模な噴火が時々発生しましたが、6 日以降噴火は確認されていません。

6 月 6 日以降、硫黄岳山頂火口の噴煙活動に特段の変化はなく、白色の噴煙が火口縁上 100～400m で経過し、最高で火口縁上 600m まで上がりました。

火山性地震や火山性微動は少ない状態で経過しています。

地殻変動にも、特段の変化は認められません。

7 月 9 日に実施した現地調査では、前回噴火警戒レベル 1（平常）に下げた 2012 年 11 月 17 日から 20 日にかけて実施した現地調査と比較して、噴煙の状況に特段の変化はありませんでした。また、赤外熱映像装置¹⁾による観測でも硫黄岳北側斜面及び西斜面の噴気地帯等の一部に高温域が認められる程度で温度分布に特段の変化は認められませんでした。

同日（9 日）に実施した現地調査で、二酸化硫黄の放出量は 1 日あたり 400 トンで、前回（5 月 29 日：300 トン）と同様にやや多い状態でした。

1) 赤外熱映像装置は物体が放射する赤外線を検知して温度分布を測定する測器です。熱源から離れた場所から測定することができる利点がありますが、測定距離や大気等の影響で実際の熱源の温度よりも低く測定される場合があります。

この火山活動解説資料は福岡管区気象台ホームページ (<http://www.jma-net.go.jp/fukuoka/>) や気象庁ホームページ (<http://www.seisvol.kishou.go.jp/tokyo/volcano.html>) でも閲覧することができます。

この資料は気象庁のほか、国土地理院のデータを利用し作成しました。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の『基盤地図情報』、『数値地図 10mメッシュ（火山標高）』を使用しています（承認番号：平 23 情使、第 467 号）。

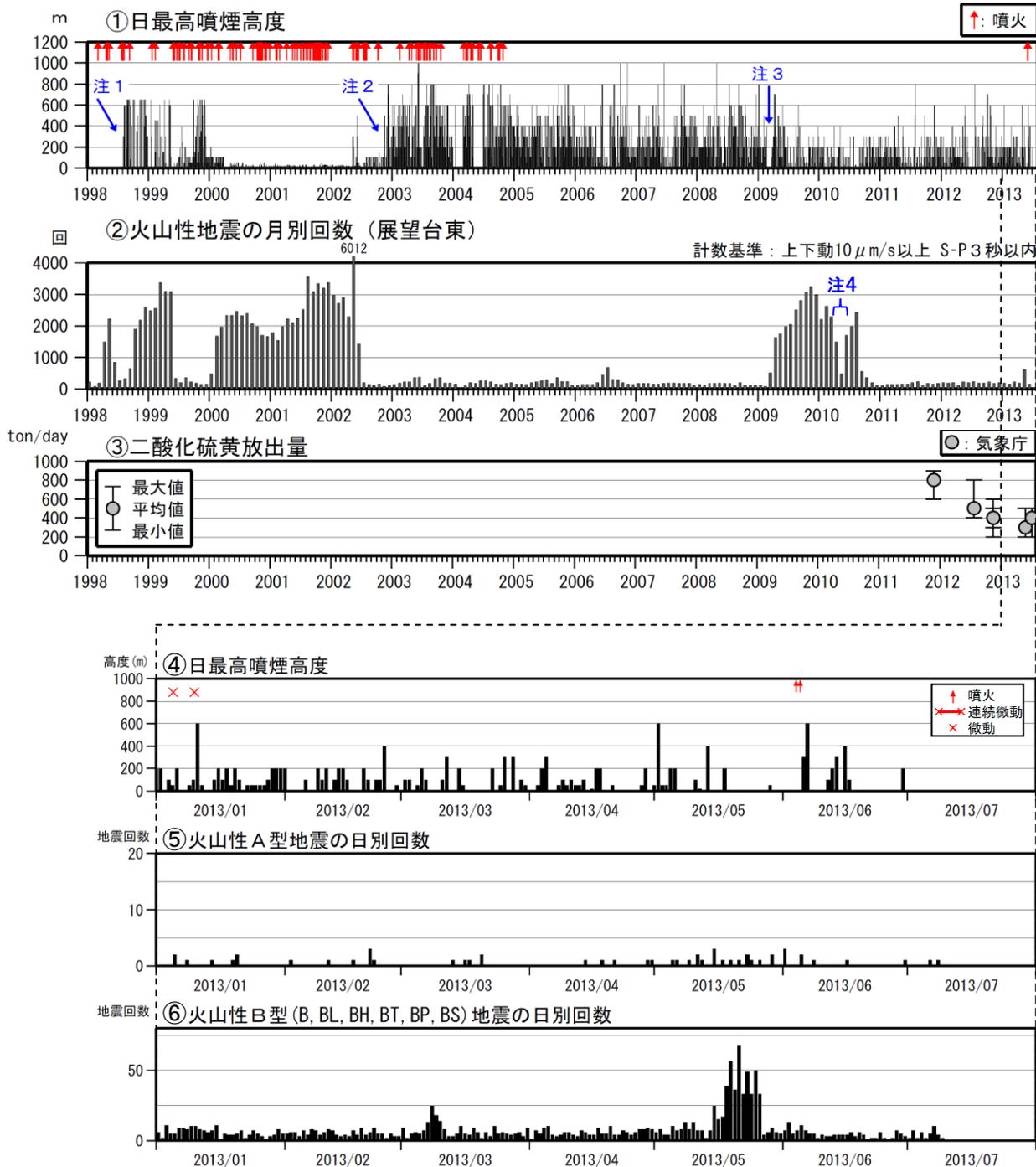
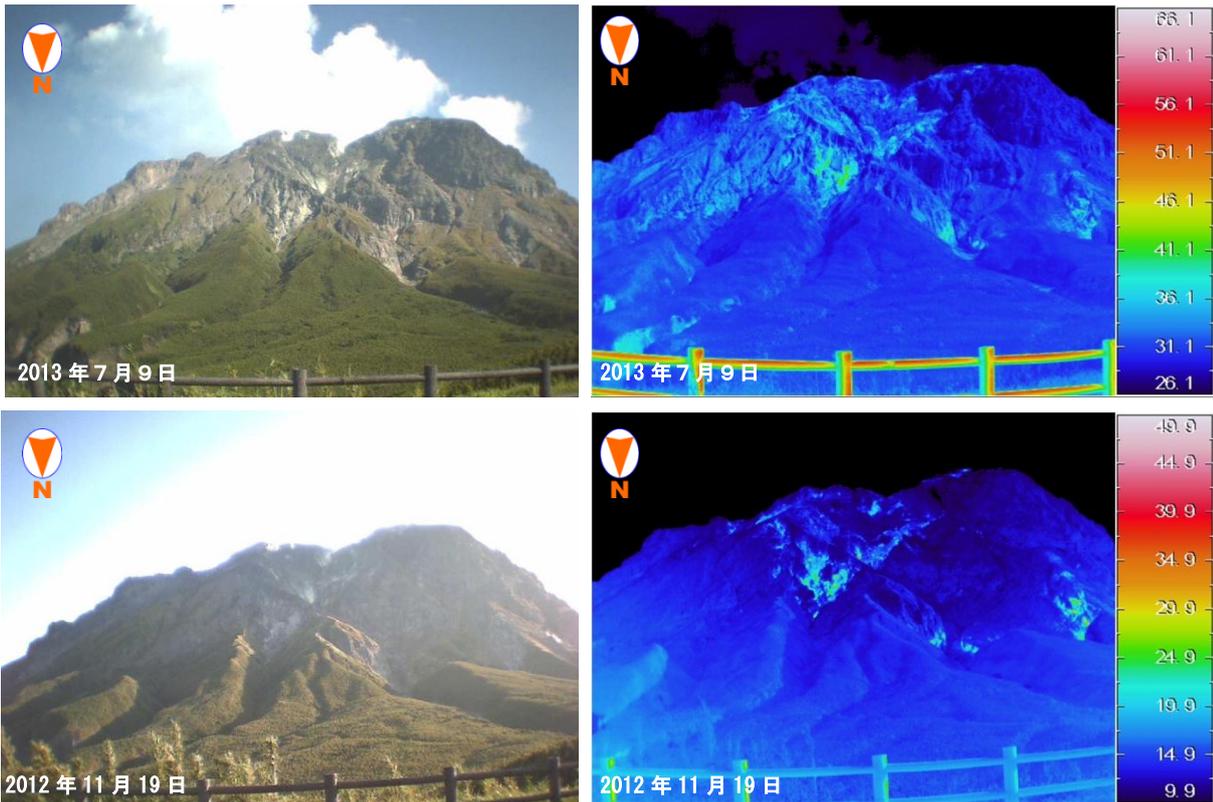


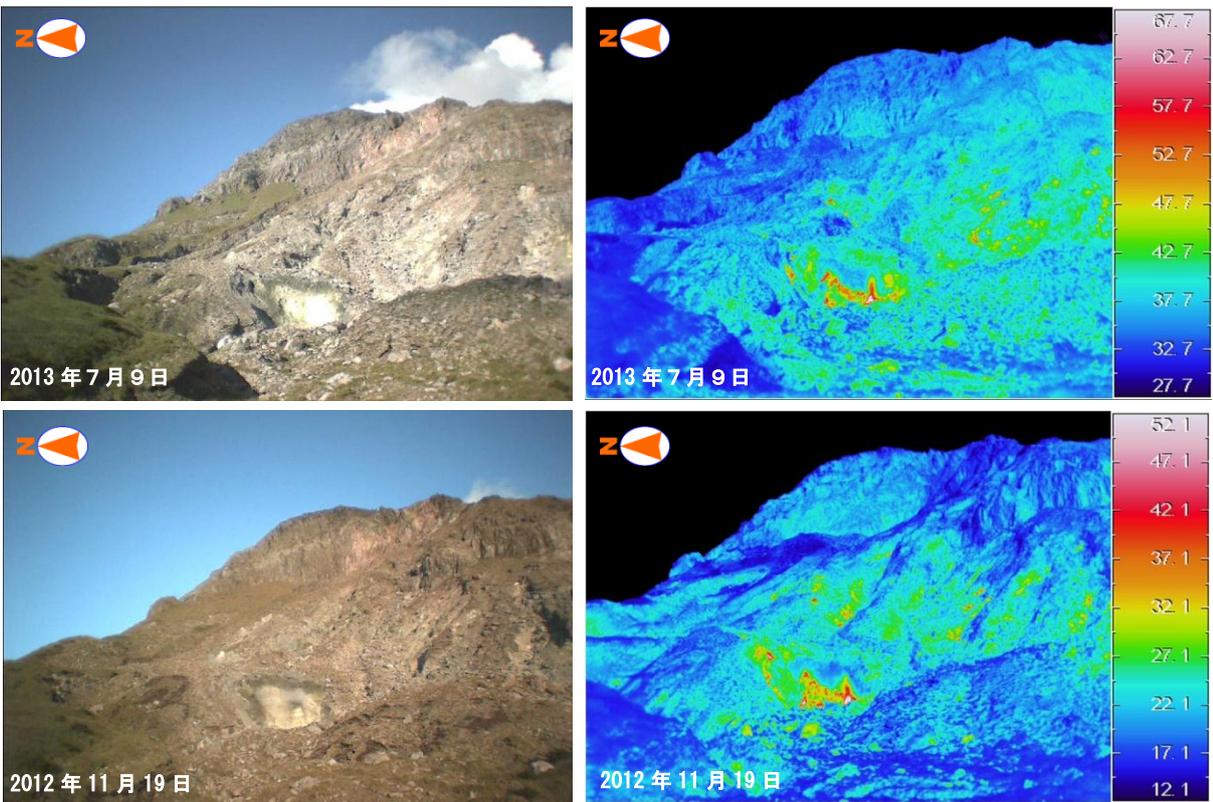
図 1 薩摩硫黄島 火山活動経過図（1998 年 1 月～2013 年 7 月 9 日）

- ・火山性地震や火山性微動は少ない状態で経過しています。
- ・9日に実施した現地調査で、二酸化硫黄の放出量は1日あたり400トンで、前回（5月29日：300トン）と同様にやや多い状態でした。

注1 1998年8月1日 三島村役場硫黄島出張所から気象庁へ通報開始。
 注2 2002年11月16日 気象庁が設置した監視カメラによる観測開始。
 注3 2009年2月23日～3月21日 遠望カメラ障害のため噴煙は不明。
 注4 地震計障害のため火山性地震及び火山性微動の回数が不明の期間があります。



写真① 左：可視画像 右：熱画像



写真② 左：可視画像 右：熱画像

図 2 薩摩硫黄島 北側及び西側の噴気地帯の状況

硫黄岳北側斜面及び西斜面の噴気地帯等の一部に高温域が認められる程度で温度分布に特段の変化は認められませんでした。

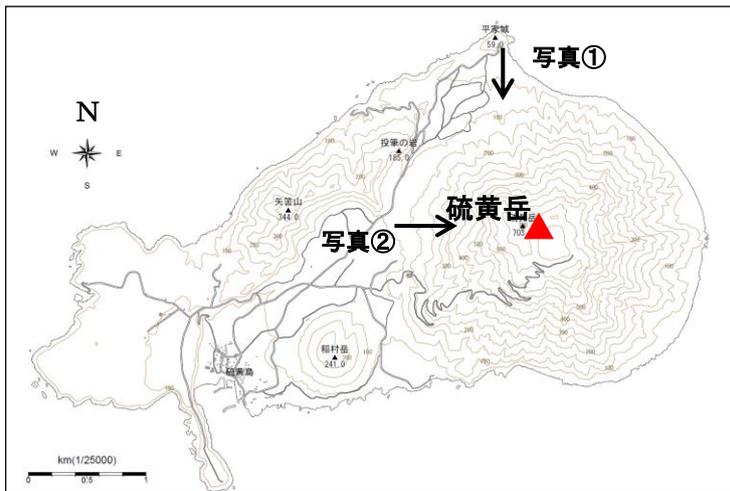


図 3 薩摩硫黄島 写真撮影点位置図

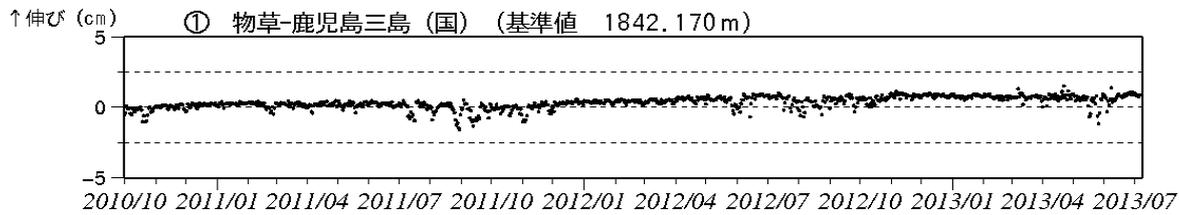


図 4 薩摩硫黄島 GPS連続観測による基線長変化 (2010年10月～2013年7月9日)
火山活動によると考えられる変化は認められませんでした。
この基線は図5の①に対応しています。

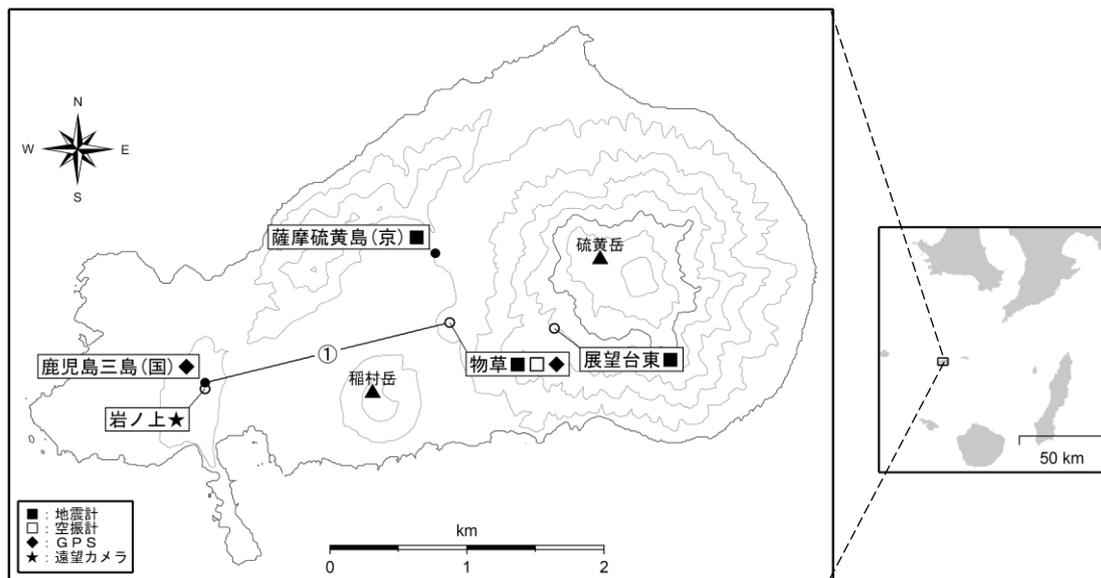


図 5 薩摩硫黄島 観測点配置図

小さな白丸 (○) は気象庁、小さな黒丸 (●) は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
(京)：京都大学、(国)：国土地理院